

## 小冊子の写真集

一週間ほど前神奈川の蝶 70 点という小さな写真集が送られてきた、それは一月ほど前に亡くなった私と同年代の蝶友、故菅井忠雄氏が一年ほど前に開催した写真展に飾られたものの抜粋をご家族がまとめたものであった。

別に他会の宣伝をするわけではありませんが、菅井氏は相蝶会の重鎮としてご活躍し、いつも穏やかな笑顔で蝶を愛する者は誰彼の区別なく接する本当に愛すべき虫屋であった。私も 2 度ほど御一緒し他の集まりでも何度かお会いし楽しいお話を聞かせていただいた。その人柄はアマチュア虫屋とはこうでなくてはと思わせるに十分なものであった。

そんな彼の没後御家族が時間と手間をかけ作った冊子であるが会の全員に無償で配布されました。

そこには氏の蝶に対する愛情とご家族の御理解と愛情が大小の写真に何気なくこめられて披露されており、蝶と蝶友、御家族の愛情とがあいまって内容もさることながら愛のあふれたもので深く感銘を受けました。

高齢社会の今自分も含めてこれから続々と蝶仲間が消えてゆくでしょう。これは自然の摂理でいかんともしがたいことではありますが、我が多摩虫にも素晴らしい虫屋さんがたくさんおられます。

多くの方が以後どうするか、どうなるかもお考えかと思いますが、蝶を愛し蝶友を愛し御家族を愛しあいされという当たり前のことができるような人でありたいと強く感じさせられた素晴らしい小冊子を与えてくれた皆さんに深く感謝いたします。

一度手にとってみたいと思われる方は E-mail:zan27270@nifty.com へお問い合わせください。

## \* 再入会

山田 厚子

## \* 例会日のお知らせ

2/15 (火) 3/18 (日) PM 総会

## \* 新刊

|                         |      |        |       |              |
|-------------------------|------|--------|-------|--------------|
| 虫たちの祝宴                  | 大屋厚夫 | 芸術出版社  | ¥4830 | 03-5225-7046 |
| 赤トンボのすべて                | 井上清他 | トンボ出版  | ¥3780 | 06-6768-2461 |
| 絶滅危惧の生き物観察ガイド<br>(西日本編) | 川上洋一 | 東京堂出版  | ¥2100 | 03-3232-3741 |
| 幻想のアリバンバン               | 林寿一  | ワニブックス | ¥1470 | 03-5449-2711 |

# ナガサキアゲハ 福島まで飛来

亜熱帯が原産で、国内では関東以南が生息域とされるチョウの「ナガサキアゲハ」を、福島県いわき市の写真愛好家丹野稔さん(57)が同市内で見つけ、撮影に成功した。写真は、研究者は温暖化で北上した可能性に注目している。



## 亜熱帯原産 温暖化で北上?

丹野さんは今月18日、虫の撮影のために足を運んだ市内の山間部で4、5匹群れているのを発見。「珍しいチョウだ」と関心を持ち、望遠レンズで撮影した。

羽を広げた際の大きさは15センチほど。日本環境動物昆虫学会員が写真を見て、ナガサキアゲハのオスと分かった。

ナガサキアゲハのオスは、青みを帯びた黒い羽が特徴。国内の生息域はかつては九州だったが、戦後北上し、ここ数年は茨城県辺りが北限だった。

チョウに詳しい東京大学総合研究博物館の矢後勝也特任研究員は「温暖化で東北での発見は時間の問題だ」と話している。さなぎでの越冬が確認されれば、1年を通しての生息域が北上したと言える」と話している。

## 白川名誉教授が大昆虫博に来場

墨田区の江戸東京博物館で開催中の特別展「大昆虫博」(読売新聞社など主催)に29日、2000年にノーベル化学賞を受賞した筑波大名誉教授の白川英樹さんが来場した。写真は、野子供時代、昆虫採集で野



山を駆けめぐったという白川さんは、昆虫好きとしても有名。国内で最も歴史の長い昆虫専門の博物館・名和昆虫博物館(岐阜市)が、展示している標本が楽しみだったという。子供の頃か

らチョウが好きで、標本もたくさん作った。自然とふれ合って好奇心をふくらませたことが、科学に興味を持つきっかけの一つだった」と話していた。大昆虫博は9月5日まで。月曜休館。

# 生き物の宝庫 水辺の魅力

日本自然保護協会（NACS-J）と読売新聞東京社は、市民参加型の環境教育プログラム「自然しらべ2010 みんなで夏の川さんぽ」を始めた。全国の川の様子を写真に撮り、川の周辺に暮らす生き物を観察するほか、人の暮らしとのかかわりを調べてもらう。寄せられた調査結果は専門家が分析し、読売新聞紙上などで発表する。

夏の川では、小魚やカエルを食べにきたサギ類など比較的大きな鳥が目に入りやすい。清流であれば、カジカガエルの涼しげな合唱が耳に入るかも知れない。ただ、岩に張り付いたその姿は岩肌こそっくりで見つけるのはけっこう難しい。昆虫では、幼虫の時期を水中で過ごすトンボ類、漆

①夕方の土手で羽を休めるジャコウアゲハ②小魚を捕食する水生昆虫の王者、タガメ（兵庫県姫路市立水族館の市川憲平さん提供）



黒の羽を持つハゲロトンボや縄張りをパトロールするオニヤンマなどが見られる。

例えば、アゲハチョウの仲間であでやかな色彩のジャコウアゲハ。その幼虫が

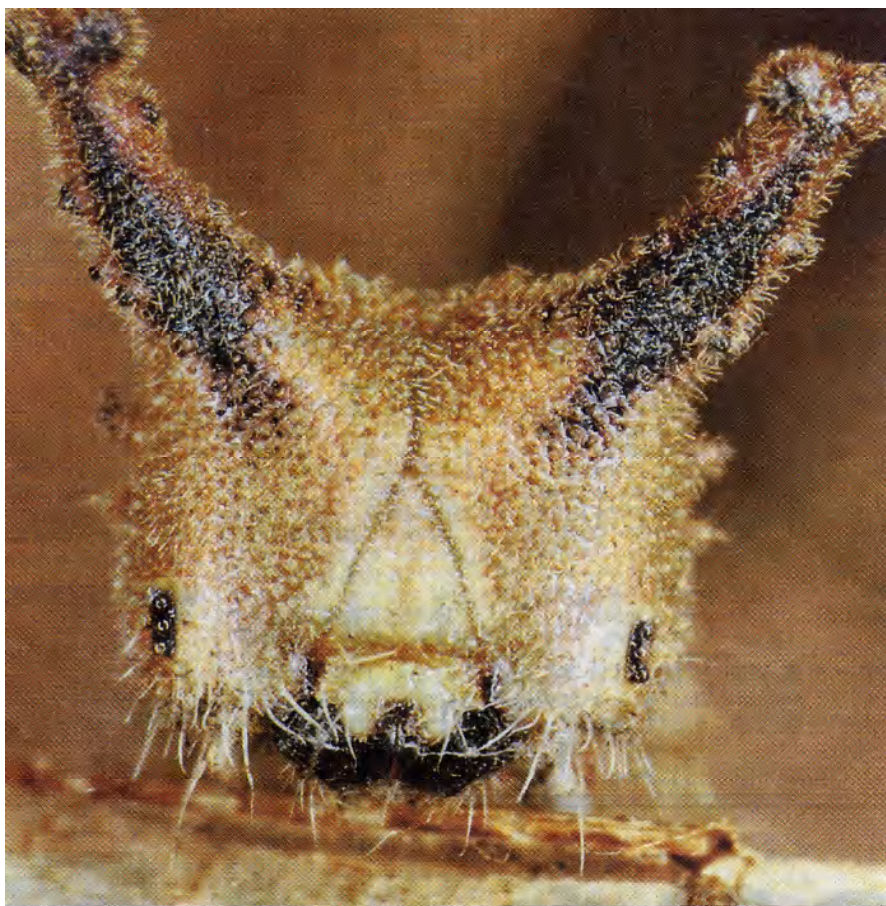
「意外かも知れないけれど、川辺にはチョウチョも多い。日当たりの良い土手では、幼虫が食べる植物がいろいろと生えているからだ」。そう話すのは、全国の本鱗翅学会会員の池沢隆一さん(64)。

食べるのはつる状に伸びるウマノスズクサ。クローバーにはモンキチョウが飛んでくる。一度飛び去っても、好きな植物に戻ってくる。ことが多いのでしばらく待って観察することもコツだ。川から水を引いている田んぼも、生き物の宝庫だ。例えば、タガメ。体長6センチほどで鎌のような前脚を持ち、小魚やカエル、小型のへびまで捕食する水生昆虫の王者だ。しかし、1970年頃から農薬などの影響で、絶滅が心配されるほどに数が減った。逆に言うと、タガメが見つかる環境は豊かな自然が保たれて

いると考えられる。

「川さんぽ」では川だけでなく、田んぼや池も見て回ろう。より多くの生き物に出会える確率が高くなる。

【主催】日本自然保護協会【共催】読売新聞東京本社【協賛】サニクリン、JRR西日本【協力】NNTレゾナント・キッズg00、学研教室、モンベル【誌面協賛】「一個人」KKベストセラーズ、「ecomom」日経BPP社、「edu」小学館、「クロワッサン」「Tara」マガジンハウス、「散歩の達人」旅の手帖「交通新聞社」、「日経サイエンス」日経サイエンス社、「山と溪谷」山と溪谷社



ゴマダラチヨウの幼虫

【終齢幼虫の体長】39mm

【国内の分布】北海道・本州・四国・九州

オオムラサキの幼虫とそっくりであるが、背中にある突起の数が違うので区別できる。オオムラサキの幼虫が4対、ゴマダラチヨウの幼虫は3対である。

かわいい顔したシャイなやつ

2010.8.19. 瑞亮(4)

いずれもエノキの葉を食べ、幼虫で冬越しをする。冬、エノキの木の根元周辺に積もった落ち葉を一つ一つ裏返ししながら、丁寧にみてゆくと見つかる。



同様に樹液に集まる。

類によれば、昆虫の顔の中でも「かわいい顔」に属する。成虫はオオムラサキと同じように大型のチョウであるが、色は地味で、黒地に白いまだら模様がある。オオムラサキと

この2種類が一緒にみつかることもある。

冬越しを終えた幼虫は、エノキの新芽が出る頃に枝に移動し、冬の装いの落ち葉色から脱皮して、葉の緑色に着替える。チョウやガの幼虫は気持ち悪い、嫌いという人が多いが、この幼虫の顔は、あどけない子ネコのような。私の個人的な分類によれば、昆虫の顔の中でも「かわいい顔」に属する。